

幼稚園修了のころの幼児の友人関係



坂 東 義 教

はじめに

幼稚園教育要領の第二章の「内容」には、原則として幼稚園修

了までに到達すべき指導目標が示されている。試みに、私が与えられた課題の「幼児の友人関係」に関する項目を拾い出してみると、次のようなものがあげられる。

「社会」の領域からは、

◎友だちと仲よく遊んだり仕事をしたりする。

◎人に親切にし、親切にされたら礼をいう。

◎人に迷惑をかけたらすなおにあやまり、人のあやまちを許すことができる。

◎先生や友だちと約束したことをする。

◎共同の遊具や用具をたいせつにし、ゆずりあって使う。

◎遊びのきまりを守る。

◎グループを作って遊びや仕事をする。
◎学級やグループの中で役割を受け持つて仕事をすることができる。

「言語」の領域からは、

◎先生や友だちに親しみをもつて話す。

◎相手にわかるよう話す。また話す態度に気をつける。

◎友だちと話し合う。

などが、その主なる項目として列挙される。

ところで、これらの幼児の友人関係に関する到達目標は、幼稚園修了のころに、果たしてどれくらいの幼児が達成できているであろうか。このような観点から、私は与えられた課題にたいして述べてみようと思う。従つて、幼児の友人関係の友人數、下位集団への所属性、結合形態、結合要因、結合変動性などの集団心理的考察をするのではなく、むしろ、個々の幼児に眼を向け、友

だちとの関係に見られる態度の発達状態は、幼稚園修了のころはどのような状態にあるものかを明らかにしてみようとするのが、この小論の目的である。

私は、いまの幼稚園教育要領が出される前の年(昭和三十八年)

に、右に列挙した到達目標の表現とは必ずしも同一の内容のものではないが、それに非常によく似た到達目標の表現内容に基づいて、幼稚園修了時(三月)に、指導目標への到達度の実態調査を行なつたことがある。この種の調査で問題となることは、幼稚園修了の時点で年長児だけを調べて結論を出すことは危険なことである。一つの時点だけ(年長児の観察だけ)から得られた資料では、もしそこに観察誤差や標本誤差が混入していた場合それを確かめることはもちろんのこと、疑問すら感ずることができない。

連続的変化過程の中の一時点として、幼稚園修了時の実態がとらえられるならば、得られた資料の信頼性が高められる。こうした理由から、幼稚園修了時の実態を正しくとらえるためには、三月における年中児、年少児の実態も明らかにする必要がある。以下、私の行なつた調査結果から述べてまいりたいと思う。

調査は、二九名の教師によって行なわれた。

観察方法は、それぞれの観察項目毎に、自由遊び場面、製作場面、競争場面などの場面を指定して当該幼児の観察を行なつてもらい、三段階と五段階の二種類のいずれかからなる記述評定尺度法によって作られた観察票にチェックをしてもらつた。このように多くの教師に依頼した理由は、一人一人の教師の負担を軽減するところもあることながら、より重要なことは、得られた観察結果に一般性をもたせられることと、もう一つは、教師の評定の主觀

調査期間は、昭和三十八年三月のはじめからおわりまでの一ヶ月間。

調査対象は、三年保育経験の年長児四三名、二年保育経験の年中児四三名及び一年保育経験の年少児二〇名の合計一〇六名である。これらの対象児の抽出法は、年長児はなるべく三年保育経験児だから構成されている一二学級から、各学級当たり四名無作為に抽出した。また同じように、年中児はできるだけ二年保育経験児だからなる一二学級から各学級当たり四名無作為に抽出した。

年少児も同様に五学級からそれぞれ四名無作為に抽出した。男児女児はいずれの抽出の場合も同数とした。従つて統計学的には、調査対象は、年長児一二学級、年中児一二学級、年少児五学級の二九学級の幼児全員を母集団とするものである。

調査方法

ごく簡単に調査法について述べてみよう。

観察方法は、それぞれの観察項目毎に、自由遊び場面、製作場面、競争場面などの場面を指定して当該幼児の観察を行なつてもらい、三段階と五段階の二種類のいずれかからなる記述評定尺度法によって作られた観察票にチェックをしてもらつた。このように多くの教師に依頼した理由は、一人一人の教師の負担を軽減するところもあることながら、より重要なことは、得られた観察結果に一般性をもたせられることと、もう一つは、教師の評定の主觀

的偏倚傾向（甘すぎ辛すぎの評定）の相殺に基づく、客観的評定の結論を導き得るために外ならない。

調査内容は下段の調査結果の表にある二八項目である。但し、これららの項目は、他に数多く依頼した調査内容の一部分であり、また、この二八項目の配列は、多くの調査結果から私が配列し直したものである。この二八項目をこの順序で、このまま調査実施したものでないことを是非ここでお断りしておきたい。

調査結果

調査結果は次の通りであるが、紙数の制限上、記述評定尺度の三段階と五段階のすべて数値を表記することができなかつたので、与えられた課題に最少限必要と考えられる資料（評定尺度の最良段階の数値）のみ記述することに止めた。なお数値も読みとり易くするため、実測値は省略し、百分率のみ、しかも、小数値は四捨五入して整数の形で示すこととした。

調査結果の考察

各項目について一つ一つ考察を試みたいが、紙数の制限を受けているので、やむなく類型別に大まかにまとめて略述することにする。

		質問調査項目										回答選択肢内容			当該項目選択百分率
		年長組					年中組					年少組			
五一	四四	二三	一四	三七	五六	五四	四五	五一	三五	四二	七〇	五一	七一	七七	年長組
二三	二九	一八	五	二一	四九	三四	二六	五〇	四二	六〇	四三	五〇	五二	七四	年中組
二〇	二	一〇	五	二〇	三〇	四〇	二〇	五八	三五	四五	五〇	三五	四〇	五〇	年少組

(1) 幼稚園修了のころ指導目標(到達目標)に達すると考えられる項目は、七〇%を越えるものでなければならない。項目①、②④、⑯、㉒、㉔及び㉖の七項目が七〇%の合格線を越えている。これは全項目のちょうど二五%に当たる。

この七項目によれば、幼稚園修了のころの幼児の友だちに対する

る態度は「誰とでも遊べる」ようである。そして「一人のじやまをしたりすることはしない」ようである。また「弱いものいじめもしない」子になるようである。もっと積極的な面からいうと、「困った友だちを進んで助けようとする」子になるようである。

また、みんなでいつしょになにかを協力的にしようとするときには、「いつもいっしょにすることができる」子になるようである。グループを作っているときは、その「秩序を乱すようない」とはしない「子になるよう」である。また、「お友だちといつもよく話し合っている」ようであり、友だちと話し合うことができる子になるようである。

ところで、これらの七〇%を越える項目はすべて幼児にとって容易に到達できる安易なものでないことは、年少児のパーセントを見るとすぐに分かるであろう。年少児において、これらの項目はすべて五〇%以下である。

(2) 幼稚園修了のころになつても指導目標に到達できそうにない

子か	困った友だちを助けることができるか	遊びや仕事のきまりを守るか	先生や友だちとの約束が守れるか	学級のいろいろのきまりを守るか	道具をひとり占めにする傾向がみられるか	みんなで協力するか	人と協力する態度が見られるか	グループの秩序を乱す子供か	他の子どもたちに人気があるか	他の子どもに強く働きかけ指導的の地位に立つか	お友だちと話し合いができるか(よく話し合っているか)	力をもつていているか
十四	進んで友だちを助けようとする	いつもきまりを守る	約束をよく守る	いつもよく守っている	全く見られない	いつもいっしょにすることができる	いつも協力的だし	秩序を乱すようないことは決してない	人気がある	立つ	いつもよく話し合っている	ついている
十五	六五	四五	六一	七七	六五	七一	七二	四七	三六	五二	三一	七九
十六	四五	三五	三五	三三	三五	三三	三五	六〇	三三	一九	二五	八八
十七	三四	二五	二五	二五	六五	六五	六五	一〇	二六	二六	一九	四五
十八	三〇	三五	五六	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	三三	三一	一〇	四五

項目を、一応五〇%以下から拾つてみると、⑤、⑥、⑨、⑪、⑫、
⑬、⑭、⑯、⑰、⑱及び⑲の十一項目があげられる。ただしこれらの項目の中には、教育的価値からいって、むしろバー・センテージが高いよりも低い方が価値が高いと解釈されるものもあるので、一律に扱うことができないし、意見のわかれることのものが、右の十一項目中には混在している。しかし、原則的には、年齢の進むに従つて変化するその方向に発達の方向性が示されていると考えるのが妥当であろう。

とすれば、項目⑤、⑥及び⑦以外の項目は、バー・センテージが増加することに発達を認めざるを得ないのでなかろうか。ただ、保育を三年も受けた場合にあまりに保育経験が長すぎることから一種のホスピタリズム的な歪みが生じ、これが発達と見誤られる危険性もないではなく、ここでの考察は注意を要するものであることだけは確かである。

右のようなことに注意をはらいながら、幼稚園修了のころといえども指導目標に到達することが困難であった項目について、その具体的な幼児の友だちに対する態度をみてみよう。

まず、「けんか」であるが、五〇%以下の四二%で、けんかをしない子は期待できない。むしろ年齢が進むにつれて、けんかをする子

が増加することを示している。同様のことが、「人を押しのけたりする」という行動にもいえるようである。「友だちに悪口をいったりする」行動にも「けんか」と同じことがいえそうである。むしろ、年齢が進み、保育経験を積み重ねることによって、自我の発達が進む場合、「人を押しのけたり、悪口をいったりする」行動は、よい行動とはいえないが、過渡的な発達過程としてむろ增加するものでなかろうか。

従つて、この種の行動をなくすることは、指導目標に掲げることはよいにしても到達目標とすることは適当でないと考えられる。「わがままな傾向」が見られなくなることは期待できないようである。

項目⑪、⑫、⑯は到達目標としてではなく、やや特殊な対人関係の実態を調べてみたいため調査項目として挿入してみたものであるが、「他の子どもから攻撃されたとき強く反撃する」ことのできる子、「他の子どもとの対抗を強くする」ことのできる子は、年齢が進むにつれてその増加が期待されたのであるが、年齢と共に著しい増加を見せてはいるが、幼稚園修了時とはいえどもバー・センテージは極めて低く、この種の行動を示す子どもの数が少ないことがわかった。

同じように数は少ないが、年齢が進むにつれて、「活動的で言

語動作がすばやくあらっぽい」行動をとるもののが増加することがわかった。

次に「人に親切で同情的で思いやり深い」行動を期待することが困難なようである。しかし、「人の困ることに進んで助けようとする」子を少しは期待できるものようである。項目⑯は五〇%を越えている。

幼児期には教師の手助けをかりないと、眞の協同活動はできないといわれているが、少し、調査項目の質問の言葉にやや高度の協力性をもり込んで質問をしたところ、項目⑯に見られるように四七%に下ってしまった。このように高度の協力行動は期待し難いもののが多い。

項目⑭、⑮、⑯は、参考までに挿入してみた項目であって、別に到達目標ではないが、幼稚園修了のころ、「人気のある」子は四四%にのぼり、理想をいえば、すべての幼児が場面交替につれて指導的地位にとって代わり、リーダーとなり得ることであるが、観察結果は、「他の子どもに強く働きかけ指導的地位に立つ」ことのできる子は二三%いることがわかった。

これらの子は、学級の自由遊びの際に生ずる自然発生下位グループ群のリーダーたちの占めるパーセンテージと一致するであろう。

おわりに

教育機関において三月は、いわば教育の総決算期である。これまでおこなってきた教育を反省評価し、その評価結果をあしがかりとして四月から新しく教育がおこなわれるべき重要な時期である。この小論では調査結果に十分な考察を試みることができなかつたが、このような観点から、この小論の資料を活用していただければ幸いに存じます。

(北海道教育大学)

日本保育学会第21回大会

会期 昭和43年5月18日(土)・19日(日)

会場 宮城学院女子大学

内容 (1) 研究発表

(2) シンポジウム

連絡先

仙台市東三番丁一六六
宮城学院女子大学内

日本保育学会第21回大会準備委員会

TEL—〇二二二の二二の六二二一